

防災紙芝居による情報弱者・社会的弱者への防災啓発活動の実践



兵庫県立柏原高等学校・インターア外部（ボランティア）
総務広報部副部長 教諭 久保 哲成

1 防災教育に取り組むきっかけ

平成 25 年（2013）より丹波市在住外国人との交流活動として外国人ママのクッキング教室を開始して市内外国人との交流を進めていました。平成 26 年（2014）8 月に丹波市豪雨災害が起こるなかで、市内在住外国人が防災への対応ができていないことを知りました。その大きな原因は、彼らがまだ日本語が十分理解できないため、災害や避難に関する情報が届かない情報弱者であるからでした。テレビのテロップの日本語が読めない、避難所がどこにあるかわからない、本国では地震を経験したことがないので対応の仕

方がわからない等でした。そのような話を市内外国人から聞き、彼らへの分かり易い防災教育を進めることが大切なことだと思いました。準備を進めようとするなかで、平成 28 年（2016）4 月に熊本地震が起こり、まず、地震への防災教育を進めていこうと考えました。

2 地震防災紙芝居の取組

外国人に理解しやすい防災教育の方法として、絵で伝えることが有効であると思いつき紙芝居を利用することを考えました。いくつかの防災紙芝居を調べる中で、童心社が出版している地震防災紙芝居の「あわてない あわてない」（脚本・絵：



フィリピン語で初披露

仲川道子) を使用することに決定しました。

まず、日本語のオリジナルの台詞を外国人にも理解できる簡単な台詞にしました(作者の仲川道子さんには童心社より許可を得ました。)。その後、生徒がインターネットの翻訳ソフトで日本語から外国語へ翻訳し、さらにネイティブの外国人にその翻訳を訂正してもらいました。このようにして、フィリピン語の翻訳から始めました。フィリピン語から始めたのは、フィリピンも日本と同様の災害大国からです。その後、ベトナム語、ポルトガル語、中国語、韓国語、英語と6か国語に翻訳しました。平成28年(2016)5月に、丹波市在住外国人の集まる「国際交流の集い」において多言語紙芝居を実演し、好評価を得ました。



ふれあいステージ



国際交流の集い

この時に居合わせた障がい者支援団体の人が、障がい者の集まる機会にも地震防災紙芝居を実施して欲しいとの依頼を受けて、平成28年(2016)12月に丹波市内で行われた障がい者のクリスマス会、平成29年(2017)6月に行われたふれあいステージ(障がい者の音楽会)で地震防災紙芝居を実施し、社会的弱者の人たちにも防災教育の啓発活動を行うようになりました。

3 豪雨・洪水防災紙芝居の実施へ

地震防災紙芝居による啓発活動に一定の評価を得たので、次は豪雨・洪水防災紙芝居の実施に向けて準備を始めました。なぜなら、地震による災害は非常にまれです。戦後の丹波市における災害発生件数を調べてみました。丹波市役所の統計によると浸水被害以上の水害発生件数は、昭和20年(1945)以降、52件にのぼり、1.5年に1回の割合で頻発していることが分かりました。浸水被害は、近年では、平成16年(2004)の台風第23号、平成26年(2014)の丹波市豪雨災害が記憶に残るものです。このような豪雨・洪水に対応する防災紙芝居を気象庁仙台管区気象台が制作していることをHPで知りました。この台詞を小さな子供、老人、障がい者、外国人にも理解しやすいような簡単な日本語に編集し、英語とフィリピン語に翻訳しました。昨年に引き続き、平成30年(2018)6月のふれあいステージ(障がい者の音楽会)で、この豪雨・洪水防災紙芝居を実施し、情報弱者・社会的弱者への防災教育啓発活動を継続的に実施しています。

注) この文章は、兵庫地理学協会2017年度夏季研究大会で発表した要旨を加筆・訂正したものです。